

# 台湾における白川文字学の受容の過去と現在

張 衛  
田 中  
京 沢

## 一、前言

白川静先生（1910—2006）の生涯の著作は豊富であり、先生が関心を向けた方面は非常に広く、中でも中国文字における造詣は大変深く、およそ全ての甲骨文・金文の研究ではどれもみな卓越さで著名である。その論述はしばしば神話学・民俗学・中国古代の歴史などの書写方式につながっており、多くの新しい観点を開拓すると同時に有意義な論点を示し、その熟達した文字学の運用によって、中国古典史の様々な面にとんと全て関わっていると言ってもよく、またその為<sup>1</sup>に学界から重要視されたのである。

台湾の文字学研究の非常に大きな一部分は、1949年に台湾に渡ってきた研究学者の指導によって出来上がったのであり、その当時の中央研究院の学者であった董作賓・屈万里先生の二人が主要な人物であった。白川先生は早くから日本で漢字を研究して、すでに高い評価を受けており、当時の台湾学界の白川先生に対する評価もまた相当

高く、遠く離れた台湾の屈万里先生ともしばしば交流されていた。私の恩師である許進雄先生はかつて屈万里先生の推薦を受け、若い頃にカナダへ行き宣教師明義世が残した甲骨を整理し、さらに甲骨の穿ち方の問題についての文章を書き、資料を探すために日本まで赴かれた。許先生が近年書かれた回顧録の中で、当時の白川先生との交流を次のように述べている。

あるいは京都大学からの知らせを受けられたのであろうか、白鶴美術館の白川先生が学生玉田継雄氏を連れて訪ねてこられた。彼らは博物館が出版した明義士先生取蔵の甲骨拓本集をすで見られており、玉田継雄氏はいま甲骨文の書籍の序跋を編集しておられ、文字を日本語に翻訳して、さらに注釈を加えるそうだ。私は序言の中で何人かの個人名を出している、彼がこの人たちの身分を知りたいとのことだったので、私が出版した第一冊を渡した。白川静先生は銅器と古代文字

において非常に多くの著作があり、学界では大変有名であった。のちに台湾の学者が白川先生の三本の著作を中国語に翻訳して出版した。白川先生は私の師である屈万里教授と手紙のやり取りがあり、さらに屈万里先生が感服した学者の一人でもあったのだ。白川先生は私の以前の著作を読まれたことがあり、私が見込みのある人材であると認めてくださったよう、先生自ら訪ねてくださり、さらに私に一揃いの、十何本にもなる大作である『説文新義』及び銅器についての論文の抜刷りを送っていただいた。白川静先生はおそらく不老の術を持っておられたようで、私は当時先生との歳の差は二十歳以上にはならないと思っていたのだが、五十歳以上は離れていたはずである<sup>(3)</sup>。

許進雄先生の回顧によって白川静先生と屈万里先生のお二方の交流が明らかになり、また白川静先生が学術の優秀な成果によって当時の学者から重視されていたことも示されている。早くから中国語での著作が『中央研究院歴史語言所集刊』<sup>(4)</sup>に載せられているので、大いに受け入れられていたと言える。1981年には中央研究院の要請を受け、第一回国際漢学会議に参加しておられ、その学術が当時の漢学研究において特別な地位にあったことがわかる。

これより以前から、台湾では白川静先生に対してすでに相当の認識を持っていたことは、これまでに先生の文章が何度も中国語に翻訳され、台湾の著名な雑誌に載せられ、または専門書が発行されるなど

の形からも見て取れる。その中でも蔡哲茂・温天河先生の翻訳した『甲骨文の世界』の一書は、台湾の白川静先生に対するさらに一歩進んだ認識を推し進め、加えて将来の甲骨研究学者必備の書となり、このうち『中国古代文化』・『金文の世界』・『漢字百話』の諸作品が次々と翻訳されると、さらなる学者と一般の人々の先生の学説に対する関心を引き起こすことになった。専著の翻訳以外にも、周法高先生主編の『金文話林』（1974—1975年出版）では、周先生が時折本の中で自分自身の注釈を加え、かつ注釈の中にしばしば白川静先生の見解（主に『金文通釈』）を載せたために、間接的に日本人の金文研究の成果に注意が向けられることとなった。この後の『金文話林補』・『金文話林附録』では白川先生の『金文通釈』・『説文新義』の二書を大量に翻訳し、その諸説を改めて並べて金文各字のはじめに載せており、このことは研究者たちの検索時の手間を省き、その上その学説は多方面に引用されることとなった。

上記は、白川静先生の著作と学説との台湾における中国語での掲載と翻訳の大きな状況である。筆者は文字学研究の資質がなお浅く、白川静先生の浩瀚な研究成果についてわずか少しばかり知っているだけであるが、今自分の知識が浅陋なことを顧みず、試みに先生の台湾での文字学への影響を整理しようと思う。時間は二十世紀の六十年代から二十一世紀の今日までに跨がっている。資料の引用の上では、台湾では早くから学者たちが往々にして直接その日本語の著作を読み、例えば当時多くの中国の古代について述べる研究者はその日本語の論説を引用し、その中でもまた先生の『金文通釈』とその系列の系統的

な著作が多いに関心を向けられた<sup>11)</sup>。故に本稿ではまず白川静先生の文字学研究の台湾で引用の様子を整理し、そして1977年の『甲骨文の世界』の翻訳を区分として、この区分の前後期の引用の様子を示す。第二部分ではすなわち主題方式をとって、学者たちの白川先生の幾つかの学説に対する討論の様子を示した。もちろん中には賛同を示したり疑問を示したりした部分も少なくないが、これは学術研究に必要な交流であることを示している。この初歩的な整理によって、台湾の学界の白川静先生の文字学の受容と討論の概況を提示できればと思う。

## 二、白川静古代文字学の台湾文字学界における引用の概況

### ——1977年『甲骨文の世界』訳本を区分として

学術研究の基礎は、資料の把握にあり、欠けた部分がなく、なおかつ全面的な材料を手に入れた後に、やっと研究の基盤が備わったと言えるのである。20世紀の六〇七十年代においては情報ネットワークがまだ未発達で、資料を得るのは難しい状況であったが、白川静先生は資料を手に入れることに関しては一番であったと言えるべきで、くまなく調べ上げ、揃えていたのである。例えば許倬雲院士が西周に関係する史実について書いたとき、『金文通釈』を資料の引用の拠り所とした<sup>12)</sup>。周法高が撰じた『三代吉金文存著録表』の「自序」では白川静先生の文献資料収集の完璧さについて盛んに褒め称えている。また敵一萍の「蔑曆古義上」の一文も、先生が「蔑曆解」の一文におい

て完璧に諸家の説を集めていること己に勝ると賞賛を述べている<sup>13)</sup>。資料を広く集めたことにより、一方では学者が情報を掌握するのに便利であり、また一方では間接的に先生の説がさらに多くの関心を得ることになったのである。

(一) 1977年以前―屈万里・周法高・許倬雲・葉達雄を例として  
白川静先生は出土文献の年代の断定、および文字を解き明かすことによって当時の政治社会状況を説明することを重視しており、当時においては、これは時間の縦方向と空間の横方向との全面的な考察を深く備えていたのである。これによって古代を研究する台湾の学者は、その説をなおざりにしてしまふことはほとんどなく、さらにはその観点を商周の関連する史実を探索する基礎としていくのである。今、1977年以前の重要な四人の学者を例にとって説明をしよう。

屈万里先生は「岳義稽古」の附記において、白川静先生の「羌族考」の中で「岳」が「嵩山」であるという意見を見つけたがためにその文章を書いたと特に説明しており、屈先生が白川静先生の著作を十分に重視していたことが明らかである。この他、「積滯屯」でも白川静先生が「滯屯」に対して孫詒讓・唐蘭などの人物と同じく上着の模様であるとして引いていることを引いている<sup>14)</sup>。『殷墟文字甲編考釈』でもまた何度も白川先生の著作を引き、例えば166頁では、『甲骨金文学論集・殷代雄族考』で「𠄎」が「肅」と解釈され、すなわち春秋時代の肅の国であることを引いており、また3404頁では『甲骨金文学論集・殷代雄族考』で「奠」が「鄭」とされ、殷商の時代にすでに鄭の地名

が存在したことを証明している部分を引いている<sup>18)</sup>。また、「西周史実概述<sup>19)</sup>」でも『金文通釈』のいくつかの器銘に対する年代の特定を引用しており、注44ではさらに陳槃が白川静『甲骨金文学論集』に賛同して、「呂刑」の呂王は確実にかつて命を受けて王と称していたという説を保留している。屈万里の引用の内容から、白川静先生の(1)古代の国家や土地の検証、(2)銅器の年代の特定、(3)文字の解釈などの三方面の研究路線を反映していることが分かる。

周法高先生は『金文話林』を著し、これによって恩恵を受けた者は無数にいる。当時は書中に引用される諸家の説には、まだ日本人の説が十分には対象とされていなかったのであるが、周法高先生の意見の中には、何度となく白川静先生の意見が出され、3584頁の「鬲」の字の説明では、「白川静の金文通釈での康侯殷の考釈の捜求が最も詳しい」とあり、白川先生の資料の収集が完整であると高く評価している。またそのままの引用もあり、2781頁の「殷」の説明には、

陳助殷(1336)「用追孝於我皇殷」の殷は考と読み、ここで

は舅と読むべきである。金文通釈二一七・桓子孟姜壺・白鶴美術館誌

第三八輯・三九〇〜三九一頁

とあり、この例では、周先生の説明によって初期の白川静先生の説の翻訳を行っているとみなしてよく、この本を参照した者はその説を知ることができるようになっていく。似たような引用はさらに3414頁の「會」・4804頁の「呂」などに見られ、5161頁の「北」では、

白川静はまた、王国維の北は燕であるとすると疑問を抱いてお

り、邶鄘衛の銘は卜辞中では殷王畿に属し、殷の滅亡後は、その族は他の地域に移り、燕魯の地は元の邶鄘ではない、……つまり白川の説と陳槃の説は同じであり、正しい。

とあり、賛成の意を表している。しかし周法高先生はまた白川静先生の説に対して意見を申し述べており、たとえば6310頁の「渦」について、「白川静は『鴻』としているが、誤りである。」とある。そのほかに、先生の中国語の翻訳書と中国語の著作を引用している部分が多くあり、1147―1152頁「冊」では鄭清茂が翻訳した「作冊考」を引用し、2362―2372頁「蔑」では先生の「再論蔑曆」の文章を載せ、これらの引用はさらに『金文話林補』で先生作品を大量に翻訳し始めるきっかけとなった<sup>20)</sup>。

許倬雲先生が『西周史』を出版したのは1984年のことで、書中では何度も『金文通釈』の年代特定の資料を引用すると同時に、わずかに部分的な修正を加えている。これより以前、「周東遷始末」(1978)の一文で、「翻訳検討をしたところ、本文の金文の銘の語句は、どれもその書から採用し、各器の時代の異説もまたその書に見える。」<sup>21)</sup>とし、その議題を論述の資料とみなし、並びに白川静先生の説をもって歴史を説き明かし、例えば金文の「貯」という文字(注・現代の学者の多くは「賈」と解釈する)では、王国維・郭沫若の「賜予」の説を採らず、白川静が「徵賦」として意味を比較的長いというように解釈しているのに同意している。この他にも、文中では『金文の世界』が「克鼎」と成周八師の関係を詳述しているのを引用している。『甲骨金文学論集』「殷代雄族考・鄭」に拠って考察し、鄭武公の西鄭は

卜辞鄭の元の領地であり、王畿内の鄭とはすなわち、周が商を滅したのちに元の鄭の地に移った人々のことであると正し、許氏は「白川氏の説は、非常に意味がある」として、河・雍の鄭人と西周の鄭人が情報を交換しあっていたことは、鄭伯が十邑を襲い取るのに都合が良かったと論証している。

葉達雄先生は台湾大学の歴史科の中で早期から西周史について研究した人物で、常に白川静先生の金文における年代特定の資料及び関連する史実・地望の推断を引用し、例えば「西周の文・武・成・康時代の文治と武功」では「郭某、白川静の二氏は鄭と解釈している。場所は今の河南省密縣の東北五十里にある新鄭と隣接するところにある。……そのためやはり河南の地をこことする。」<sup>(22)</sup>と言っている。また、何人かの説を引用し、どれも河南の地の推論に賛同している。「西周馬政初探」では、「楚走馬」に対して、「郭某は楚と走馬はどちらも官名であるとしている。楊樹達は楚の地名であるとみなし、走馬はよく走る馬であるとする。しかし白川静氏は楚が動詞であるとみなし、輔佐という意味で、走馬は官名であるとする。」<sup>(23)</sup>と言っている。白川静先生の説は『金文通釈』によるもので、「楚」は現在では多くは「胥」とされているが、補佐の意味とすること疑いなく、したがって葉達雄先生の見識が、白川静先生の考釈の正確さを際立たせていることが分かるのである。葉氏は他にも多くの文章で西周の史実に関して検討しており（1977年以前に限らず）、その文章の中で白川静先生の年代特定の観点と制度の討論を引用することが少なくなく、多くは『金文通釈』によるもので、少数の「刑国始末記」は『甲骨文の世界』

の意見からの引用であり、ここでは全てを挙げることはしない。<sup>(24)</sup>

以上に許倬雲・葉達雄の例をあげたのは、台湾の当時の古代史研究の学者が白川静の学説を重視していたことをはっきりと示すためであり、たとえ完全には賛同していないとしても、その学説の中から自身の歴史の観点を述べる事ができたのである。このほか、白川静先生の『金文通釈』の一書は陳夢家の『西周銅器断代』・郭沫若の『两周金文辞大系』の後を継いで、資料の収集がさらに完全となり、なおかつ明確な年代特定が行われたと言いうことができ、当時の两周の出土史実を検討する上で重要な著作として、周法高は「三十年来の殷周金文研究——「三代吉金文存補編」代序」の中でさらに『金文通釈』の概況を詳細に紹介し、その上その方法は郭沫若・陳夢家の二人を承継している<sup>(25)</sup>と認めた。当時は多くの研究者がその書が整理した関連する金文を根拠に論述を加え、その後陸統有『殷周金文集成』が器物によってさらに多くの揃った金文資料を配列し、<sup>(26)</sup>また馬承源主編の『商周青銅器銘文選』では周王の器を羅列してさらに詳細な字句の考釈を載せ、<sup>(27)</sup>『金文通釈』の引用資料としての地位は低くはなつたとは言っても、書中の白川静先生の幾つかの考えは今でも絶えず引用され続けているのである。次にそれについて説明する。

## (二) 1977年から現在に至るまで

1977年の『甲骨文の世界』の翻訳は、台湾にとつての白川静に対する認識をさらに一歩推し進めることになった。この本の翻訳によって、引用する者は絶えることなく、例えば1979年の杜正勝が

著した「周代封建的建立」の文章では、『甲骨文の世界』の翻訳を使用している。<sup>(28)</sup>このほかに、台湾の博士や修士論文による引用の状況には、以下の幾つかの状況がある。(1)甲骨について研究する者では、たとえば張惟捷『商代甲骨田獵刻辞研究』が「犬」の管掌について言及している。<sup>(29)</sup>さらに陳冠勳『殷卜辞中牢字及其相關研究』、蔡依静『出組卜王卜辞的整理与研究』<sup>(31)</sup>、林文仁『甲骨象形文形義考述』<sup>(32)</sup>、林雅雯『甲骨塗辞研究・以塗朱甲骨為核心』<sup>(33)</sup>などの論文にどれも引用が見られる。(2)宗教・政治文化研究では、例えば王蔚『殷商羌族及岳神芻議』<sup>(34)</sup>、石蘭梅『論商代的王權及其發展』<sup>(35)</sup>、そして林素娟『先秦至兩漢婚姻礼俗与制度研究』では姓氏二分の観点を引用している。<sup>(36)</sup>甚だしきに至っては、さらに早期のもので、劉文強『春秋時代封建制度解體』<sup>(37)</sup>がもっと先にこの訳本を引用している。ここでは以上の数例を挙げて、この書の翻訳が、広い範囲で引用されて、今に至るまで途切れることなく続いていることを示した。

1982年の『金文詁林補』は『金文通釈』の一書を大量に翻訳し、学者にさらに多くの白川静先生の学説を理解させることができたため、進んで引用された。あるいはこの本の翻訳によって、その学説に注意が向けられ、のちに原書の内容が振り返って見られている。例えば1987年の王明珂が著した「西周矢国考」は『金文詁林補』(1622頁)を使い、白川静の虢国に対する考察に言及している。<sup>(38)</sup>江淑恵『郭沫若之金石文字学研究』も『金文詁林補』が翻訳した白川静の説を利用している。しかしながら『金文通釈』が相当な体系を持ち、<sup>(39)</sup>主には器銘を主としていて、『金文詁林補』の字頭の列の分け

方や各説とは同じではないがために、台湾の学者はなお習慣として白川先生の原書を引用し、また原典は資料において揃っているため、原書を引く者が多い。以下にその例を挙げる。

(1)台湾の西周史を研究する者は、先述した許倬雲を除いて、杜正勝もまた非常に重要な学者であり、その文章はいつも『金文通釈』を引用している。例として「略論殷遺民的遭遇与地位」<sup>(40)</sup>では白川静が日名のある西周器を東方氏族のものとするという方法に言及し、「あいまいさが残るきらいもあるが、殷の遺民を識別する参考になる。」とし、さらに「周代封建制度的社会結構」では、白川静先生の西周が東進して停滞したのちも、周族が依然として江漢の徐淮一帯に継続して戦を行っていたという意見を持ち出し、『周代城邦』でもまた『金文通釈』が収録している青銅銘文に関する史実の討論を行った。<sup>(42)</sup>王文陸は宣王の史実を検討する際に、『金文通釈』の年代特定と銘文を採用し、なおかついくつかの観点を採って信用しており、例えば宣王が淮夷に対してすでに再び征伐は加えておらず、これは周室が東遷の準備をしているとする点などである(322頁)。あるいは白川静先生の「方氏は、師袁である」という氏族説を用いて、郭沫若の「袁」は鬪であり、「方」は名前であり、名と字の対応であるという説に反駁している(281頁)。<sup>(43)</sup>陳昭容は周王室と諸侯両者の婚姻関係について深く検討しており、その文章の中で同姓の婚姻の存在について反対し、白川静の『金文通釈』四卷「楚王鐘」で楚王が同姓女のために斃器を作ったとする解釈が比較的ふさわしいとするのを引用している。<sup>(44)</sup>雷晋豪も白川静の「元年師旅簋」が夷王の代の時の周自

身と斉国との関係と解釈しているのに言及している。<sup>(45)</sup>

(2) 器銘の解釈では、金文の器銘を研究する者が、その説を引用しているのをよく見かける。例として早期の沈宝春先生の修士論文『商周金文録遺考釈』では大量に引用している。<sup>(46)</sup> 江淑恵の修士論文でも引用が見られる。<sup>(47)</sup> 洪恩耕は白川静の「晋公夙皿」で盟の字の下に「祀」の字を補ったことに賛同しており（55頁）、<sup>(48)</sup> 文と意味が通じ合っている。金信周は白川静が「耳尊」を観察して（『金文通釈』巻の下）、祝賀の辞が西周後期の銘文に多く見られるという見解を引用している。<sup>(49)</sup> 以上、器銘の研究者が白川静を引用することが非常に多いことについて、ここでは数例を挙げて説明した。<sup>(50)</sup>

これ以外にも、台湾の学者の『金文通釈』の引用は、文字の考釈・国地名・文例・人物の年代の特定などの方面の研究においてもなお見られ、その中でも年代特定の部分は以下の節でもう一度詳しく述べる。

1971年に『金文の世界』が出版され、1989年には温天河・蔡哲茂が中国語に翻訳したが、翻訳される以前においても、この書物は西周史の研究で既に何度も引用されており、先述の許倬雲、杜正勝の二人はどちらもそうである。翻訳された後は、この本を参考にする者がさらに増加し、例えば黄仁甫はこの本の中の金文資料に関する部分を引用して述べ、論述の基礎としている。<sup>(51)</sup> 鄭憲仁は『金文の世界』の幾つかの論点に対して評述をしており、たとえば「休王」は康王の生存時の呼称ではないという点などである。<sup>(52)</sup> 郭秋鑫は白川静が金文「王姜」の描写が当時の女性の地位を説明しているとすることを引用

している。<sup>(57)</sup> 柯佩君は、白川静先生の鑄造技術を根拠に青銅の年代を区別するというのは重要であるけれどもその他の要素（銘文など）を考量することが不足しているという意見を認めている。<sup>(58)</sup> 雷晋豪は白川静が昭王の南征に対して、周代の南の地方を研究する手がかりになるとしているのを参考にしている。<sup>(59)</sup> 『金文の世界』の一书は広範性が強く、歴史の縦の面と空間的な構造を併せ持ち、当時の社会制度に関しても欠くことなく補っているのである。

1973年の『甲骨金文学論叢』では白川静先生の甲骨・金文の数篇の文章を収録しており、先に述べた既に翻訳が行われている三書の状態と比較すると、この本のいくつかの部分の篇章は既に中国語で発表されており、たとえば「再論蔑曆」や、または以前に中国語に翻訳された「作冊考」などがそれである。そのほかの「殷代雄族考」・「召方考」・「羌族考」は古代の地理に言及しているために、多くが地理の方面の文章に関係しており、大半がその説を参考にしている。杜正勝は白川静先生の卜辞「鄭」の考察を参考に、鄭が殷の強宗大族であると推論している。<sup>(60)</sup> 鍾柏生は白川静先生の「鄭」が河南省の新鄭にあるという説について言及している。<sup>(61)</sup> 王明珂と筆者の博士論文もまた「羌族考」が羌を河南省西部の平原と丘陵の交差する土地に置いたという説を参考にしている。<sup>(62)</sup>

1964年に出版された『金文集』は、『金文通釈』と比べて台湾では引用は少ししか見られない。<sup>(63)</sup> 1969年から1974年に出版された『説文新義』は主に新しい資料によって『説文』の字形を説き明かしており、この本は『金文詁林補』の中で大量に翻訳され、学者

が字形を討論する際に容易に引用できるようになっている。周鳳五先生は「説巫」の文章を『金文詁林補』の翻訳に活用しており、白川静先生が「巫」の字を墓室の形としており、祭祀の職能を持っていたとすることに言及し、周先生は「巫」と「巫」の字が関連して、字義は承襲の関係を有しているとしている<sup>(64)</sup>。許育龍は声字について研究し、『説文新義』で「吏」が「亦た声字」とされていることに關して、会意字の基礎を形成していることを引き、その上でその説が信頼するに足ると認めている<sup>(65)</sup>。劉紹鈴は白川静の『説文新義』などの「文・「徳」の符号の解釈を利用して、改めて「文学」の背後に含まれる意味について注釈している<sup>(66)</sup>。

早く1978年に既に出版された『漢字百話』は、2012年にやっと鄭威によって中国語に翻訳されたが、翻訳されてまだ日が浅いためか、台湾の中国語・歴史に関する学者の引用は少ないが、ただデザインに関する専攻では多く利用が見られ、白川静先生の漢字自体の符号の特質に関する講述を活用して、各方面のデザインを行い、漢字の影響力を開拓していつている。

### 三、台湾における白川静の文字学の学説の討論と応用

#### (一) 字句の解釈

白川静先生は文字の字源と出土文献の字句については全て関連する著作を残しており、例えば「蔑曆」の一語について、嚴一萍は白川静先生の捜査の詳細さを称賛すると同時に、「白川静先生の「蔑曆解」は蔑曆を『旌を伐った功歴』の意味であるとし、後世の関関と同義語

であるとしているが、この説は甚だ精確である。」と述べている。邱徳修は白川静先生の「蔑曆解」を翻訳した上で、「蔑曆」を勉勵の意味としている<sup>(71)</sup>。

「文」を模様であるとする説に關して、白川静先生は「死者の霊が遺体から出て行ってしまふのを防ぎ、これにより死者の復活を祈ると同時に外から邪悪が遺体に侵入するのを防止するのである。」<sup>(72)</sup>とし、その説は文学的な考え方を触発し、先述の劉紹鈴の『「文」字考・関於文学—人類学的詮釈可能』ではその論によって、人類学の角度から「文」が内包する意味について考えている。黄錦樹はこのように述べている。「白川静の創意（もちろんこれも純粋な想像であるかもしれないが）において、彼はそれが遺体に描かれていると想像している。彼の叙述の中では、文は『巫術性の裝飾の符号』であるとして、遺体上の行為であり、時間が既に結束した遺体の上で時間を逆転させようという術式である。」<sup>(73)</sup>字形による創意によって別の思惟を引き起こすのである。

周法高の『金文詁林』の注釈には白川静先生の文字の解釈に対する反応が少なからずあることは、先述の通りであり、ここで再び述べることはしない。他に、『金文詁林附録』でも周法高はまた何度もその説を引用しており、「」字の下には、白川静先生がこの字は「干」の字から音を得ており、「雁」と読むとしているのを援引し、周氏はこの説が正確であるとみなし、鄭憲仁もまた「この説の優れている点は字音と文献の面においてどちらでも顧みることができ、ゆえに本文はこの説が比較的拠るべきであると認めるのである。」<sup>(75)</sup>としてい

る。文字の考釈は出土文献研究の基礎とみなされ、白川静先生は中国文字の認識に対する自分なりのルールがあり、幾つかの考釈が現在の一般的な見方とは必ずしも同じではないけれども、その中では当然新しい出土資料（白川静先生が目を通していない大量の新しく出土した楚簡など）に言及しており、<sup>(76)</sup>他にも幾つかの意見は文字の考釈の外の思惟を激発することができ、特に先述の『漢字百話』は台湾のデザイン学科に対する影響にまで及び、その文字・字句の考釈の重要性を示すに足るであろう。

## (二) 国族と地理の考察

白川静先生の『甲骨金文学論集』・『金文通釈』では時に国族と地理に関する検討が見られ、例えば「殷代雄族考——鄭」では卜辞の「奠」は周代の「鄭」の字の前身であることを提示し、先述したように許倬雲『西周史』では白川静が鄭武公の西鄭は卜辞の鄭のもともとの領地であり、王畿内の鄭とはすなわち周が商を滅ぼしたのちに元の鄭の地に移った場所であると考訂しているのを引用しており、ゆえに「白川氏の説は、はなはだ有意義である。」として河・雍鄭と西周の鄭人が互いに通じ合って鄭伯が十邑を取るのに便利であったと論証している。杜正勝はさらに白川静が卜辞の多くが奠・南奠・北奠などの地名を含んでいることを探察していることをもって、それが殷の強宗大族であるとしている。<sup>(77)</sup>鍾柏生はまた白川静の「鄭」が河南省の新鄭にあるという説を引いている。<sup>(78)</sup>白川静先生の「奠」に対する考察は、当時の多くの後の鄭国の地と変遷についての討論を促した。<sup>(79)</sup>

「召方考」では「召方」と周初の召公の存在との関係を、上文で提示したように白川静が日名の西周器が東方氏族の方法に返ったことを有していると認め、「あいまいさが残るきらいもあるが、殷の遺民を識別する参考になる。」<sup>(80)</sup>と言っており、周初の召公の諸器に殷人の日名が存在する現象を仔細に観察し、白川静は召公一族が殷商の頃すでに存在し（『甲骨文の世界』141頁）、殷の文化の影響を受け、日名を用いていたことを認めていることを蔡佩玲が了承し、最終的にはこの説には不足する部分があるとしているけれども、これについての詳論はまだ見ていない。<sup>(81)</sup>黄銘崇先生は白川静の説は嚴肅に考慮すべきものだと、このように言っている。

白川静は召公の家族は「東方系の貴族」であるとしており、召公の家族の動向は、商周のバランスに影響する鍵であるとしている。もし武丁時代にかつて「邵」を討伐し、なおかつ召公が西周の時期の政治において非常に大きな力を持つ役を演じていたことを考慮するならば、特に商人を動員する時には、常に召公を経由して顔を出していたのである（『尚書・召誥』）。そして西周に入った後は、相当長い時間、召公の家族の成員は依然として長期にわたる「日干」を使用しており、白川静の指摘したこの種の可能性は嚴肅に考慮すべきものである。<sup>(82)</sup>

日干と周初の影響によって、白川静の論説に反応している。ひょっとすると「召方」は「召」とは関係がなく、「召」はあるいは繁体字の「𠄎」が生まれたのと関係しているかもしれないが、<sup>(83)</sup>しかしながら白川静先生の日干などの現象に対する推論は、覆しがたいものである。

上述の二例は学界において比較的多く討論されていることであるが、その他の白川静先生の国族と地理に対する推論の引用もまた少なくはなく、例えば先述の屈万里が卜辞「岳」が太岳山であると考釈した時に、白川静の「嵩山」の考訂に言及し、王蔚も『甲骨文の世界』の「嵩山」(57—58頁)の説に焦点を当てて討論をし、そして「霍山」をもって結論とした。<sup>(85)</sup> 陳美蘭は『甲骨金文論叢・五集・金文索引——地名』・『金文通釈』の地名に対する整理を、書中に多く引用し、時には読者の検討を待ち、また時にはその観点に同意することを述べ、例えば「恆簋」の「直鬲」は、白川静は地名と見るのは正確であると認めている。<sup>(86)</sup> 葉達雄は白川静先生のいわゆる「豊」とは地の大名であり、**莽**はその地の辟雍があるところである。<sup>(87)</sup> 『金文通釈』、344頁)との説は比較的適当であるとみなし、王文陸もまたこの説が郭沫若の**豊・莽**の名の説を補足できると認めている。<sup>(88)</sup> しかし高木森はこの説は検討を待つとしている。<sup>(87)</sup>

このほかに、蔡哲茂先生は「殷代雄族考——雀」で考訂されている「雀」が王族であるとの説は可能な説だと認めている。<sup>(88)</sup> 以上ここで挙げた数例は、白川静先生が殷周の国族と地理を考える上において、地域研究に対して著しい深遠な影響を持っていることを示している。

### (三) 出土文献の年代の特定

白川静先生の『金文通釈』は陳夢家・郭沫若の器銘によって年代を特定するのを受け継ぎ、ゆえにいつも歴史学者から西周の時期の資料を検討するのに利用されていることは、すでに上文で言及した通りで

ある。例えば洪燕梅はかつて『金文の世界』を引用して、「以前の多くの学者たちが研究上で間違いをしようするのは、時代の区分がはっきりしないためである」と言い、金文研究の時代区分における重要性を強調した。<sup>(89)</sup> 周法高は『金文通釈』の西周の部分を活用し、干支の紀日と十干の命名について考察してまとめた。<sup>(90)</sup>

白川静先生の年代特定は幾つかの手がかりによるもので、「休王」のように、早期の郭沫若は「孝王」の称であるとしていたが、のちに「孝王」の前の、何王も指さない。<sup>(91)</sup>と改めている。白川静の『金文通釈』では「康王」であると主張し、『金文の世界』ではさらに「休王」の諸器と比較して、形状と銘文の内容が、「康王」の時代のものと符合するとしている。周法高は唐蘭の「休」は美称だとする説を採り、「休王」は必ずしも特定の王の呼称ではないとしている。<sup>(92)</sup> 現在、大量の金文の資料から考えると、「休王」は特定の王の呼称だとするのはまだ保留とすべきである。

暦譜の推断に関して、白川静先生は呉其昌の『金文曆朔疏証』を用いて、主に太初暦を基準としており、周法高は黎東方の研究が太初暦の不足するところを指摘したのを採用して、推算した暦譜は必ずしも実際の暦譜と符合するとは限らないとした。<sup>(93)</sup> 暦譜に問題があるかもしれないとしても、周法高は白川静先生の各器の年代の考察を相当重視し、多くの文章で白川静先生の説を引用しており、さらに月相と王の年紀を考える時に、白川静の銅器の年代の特定を、呉其昌・黎東方・郭沫若・董作賓・容庚・唐蘭・李学勤などの人の説と校勘している。また「師兌簋」の年代の帰属は、「西周彝器断代小記」の宣王

二元説に対して評論しており、「白川の説は何の文献上の根拠もないけれども、しかし推理において成立しないということはない。」<sup>(96)</sup>と  
言って白川静の宣王改元説に賛成している。

曆譜の考訂が及ぶ範囲が相当広く、また学者間の曆譜に対する推論の基準点が必ずしも同じでないことよって、推測して算出される年代には一致しない部分も出てくる。張光遠は白川静先生の「庚壺」は齊の靈公四年（『金文通釈』、38輯、374頁）とする説に対して同意せず、周の靈王二十三年（齊莊公五年）であるとしている。<sup>(97)</sup> 洪恩耕は白川静先生が董作賓の中國年曆簡譜によって「楽書缶」の正月元日己丑は西元前590・574・569の三種の可能性があると推定するの  
に焦点を当てて、検討を行い、最終的に西元前574年が比較的信頼できるとした。<sup>(98)</sup>

金文の年代の特定の一部分は、人名の資料に頼り、文献によって対照を行い、張光遠は白川静先生が「麥方鼎」の「邢侯延囁于麥」の「延」は周公子邢侯の名であるとして、これを以て康侯簋「延令康侯鄙于衛」の論述を証明するのに同意しており、<sup>(99)</sup> 葉達雄もまたこの説に同意している。<sup>(100)</sup> 周法高は「だから私は二器中の（麥方鼎・臣諫簋）の『延』はどちらも人名ではなく、動詞の前に置かれた虚詞であると思う。」<sup>(101)</sup>と述べ、「延」を人名とする立場に対して疑問を呈している。謝博霖は袁林が翻訳した白川静先生の『西周史略』で金文の「伯酥父」は共伯和とする説を採用して、同じくその「皇君」は共伯和を指し、呼称で単純さを超えた臣属関係にあったことが見出せることを認めている。<sup>(102)</sup>

学者たちは白川静先生の金文の年代の特定に対して部分的に疑問を示しているが、しかしその観点に対しては重視し、関連資料の判断に利用していることは明らかであり、たとえば張光遠は、白川静が陳侯午簋の銘文はもともと鑄造されたものかどうかについて疑問を呈していると林巳奈夫が言及したことにより、その説が銅器の製造方法の討論を行っていることから、「字模」の印の製法を示している。さら  
にこの方法を整理して、その他の青銅器の証拠を見つけしており、たとえば「秦公簋」<sup>(103)</sup>は、白川静先生に対する質疑の具体的な論証となっている。

金文の年代の特定と曆譜の推論は銘文が示す情報に頼っていて、その上器物自体の時代の特徴とにらみ合わせることで、推論の基礎を増加させるのである。白川静先生は器物自体の真偽の問題を非常に重視しており、また銘文が示す人名・干支の情報に対しても重きを置いて、その上で系列の器物の排列を行い、十分な系統性が備わっている。いくつかの推断は、字句に合わせた考釈の新しい認識と新しい出土器物の情報に伴って、白川静先生の説明の一部分から立論の基盤を失わせてしまうことも免れないが、かえってその学説の時代的な意義を際立たせ、さらにその学説は学術研究に対する貢献を推し進めるのである。

#### (四) 制度・組織の面

古代文字の一部の資料は、制度の議論にまで及び、上文で述べたごとく白川静が「楚」（現代では「胥」とする）を補助の意味として解釈しているように、幾つかの銘文の中の人物地位の関係を明瞭にしう

る。「成周八師・「殷八師」など、この研究は西周史の重要な問題であり、杜正勝の「周代封建的建立」は『甲骨金文学論集』の「釈師」で周人が衛地駐紮八師について「殷八師」となり、成周西六師と天下を統轄する主力であったとするのを採用している。<sup>104</sup> 葉達雄は成周八師は即ち殷八師であると反対している。<sup>105</sup>

葉達雄は白川静先生の辟（「鬻鬻器」、『金文通釋』卷一下）は辟事の君であり、辟天子・朕辟天子・厥辟・辟侯・乃辟一人・辟我一人・乃辟・辟井侯は全て君臣関係にあり、無用が女君をなしているとするのを引用して、またこの説は信頼できるとしている。<sup>106</sup> 黄銘崇先生はのちに金文中の「辟」の字は丈夫に対する歿称として用いられたことを挙げており、これもまた白川静先生の説の佐証とすることができ<sup>107</sup>。

西周の幾つかの制度の問題を検討するにおいて、金文の手がかりは確実に重要なよりどころであり、周聰俊は饗礼を探討して「日本人の白川静は『金文通釈』において『噩侯は禮を王に納れ、王はこれに裸礼を与えて、噩侯は王に聳する。これは饗宴の後に行うのではなく、饗宴の際に行った儀礼である。』と述べ、また『聳は冊書の上に両手をおく形であり、元は盟誓祝嘏の儀礼を表している。』とも述べている。……その説はもとより卓説であり、その全義が明らかになっていないことが惜しまれる。」<sup>108</sup>と云っている。台湾の学者が十分に白川静先生の上古の関係制度の問題の論述を重視していたことがわかる。白川静先生の著作は豊富であり、制度の問題に言及する内容が大変多いため、幾つかはすでにある研究成果を承継して、さらに論証を加えている。

また部分的には、自身で資料を整理した過程における観察を述べ、発展して今に至るまですでに学者の間での既定の常識となったものがあり、従ってこれらについてはいまださらに一歩進んだ引述と論証は見られない。

以上四点を挙げて、台湾の学界における白川静先生の文字学の成果に対する討論と応用の様子を述べた。その他の討論の引用もまた少くないことについて触れると、朱歧祥はかつて白川静先生の文字の検証が時に神話研究に及ぶことについて論じている。<sup>109</sup> 陳致談は「南」を楽器と方位で、発展して楽調の名であるとした時に、白川静先生が郭沫若が「南」は楽器が南の方位に置かれたとする仮説に反駁したのに依っている。<sup>110</sup> 幾つかのこのような引用は数が多量にあり、有効な整理をするのが難しく、私の能力ではとても及ばない。読者のご寛恕を願う次第である。

#### 四、結語

白川静先生の学術の影響は、大量の関連する著作によって、その源流が大変長いものとなっている。早期の台湾では大陸との交流が簡単ではなく、書籍の収集にも限度があったが、当時の日本の学者は、資料の整理や論述において際立った人材が多く、白川静先生の『金文通釈』はその一例であり、陳夢家『西周銅器断代』・郭沫若『两周金文辞大系』の二者に補充と修正を加えるものとして、台湾の当時の古代史・古文字学の研究に大きな影響を与えた。その資料を使わずに論述の基盤を作る学者は一人もおらず、かつその学説に対して反応したり

引用したりするのである。ただ、大陸との交流が盛んになり、新しい資料が次々と出土すると、全面的に整理された著作が生まれてくるようになり、馬承源『商周青銅器銘文選』、中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成』が陸続と出版され、資料がさらに豊富になって、相当程度の量の資料が『金文通釈』に引用されたものに取って代わった。このほか、『甲骨文の世界』・『金文の世界』・『漢字百話』や『金文詁林補』に散見する『金文通釈』・『説文新義』などの翻訳が世に問われるにしたがって、古代史・古文字などの研究者の白川静の学説に対する認識を促すだけではなく、さらに文学・神話・民族などの方面の読者も絶えず増加している。学界では繰り返し白川静先生の論点を引用しており、双方で異なる論述の観点も存在しているが、このことはその学説の有する学術的な意義を際立たせている。たとえば周法高は、当時『金文通釈』を評して、「学者たちは彼の本に対して反論するところがあると表明することもできるが、この書は新しい方向に向かって走っているいわば先駆なのである。」と述べている。実はこの観点は、白川静の学術研究全体に至るまで拡大することもできる<sup>(1)</sup>であり、その路線は当時確実に最新の研究であったと言え、現代においても、白川先生の多くの学説はなお深く考えさせられるものであり、このため台湾の学者はなおその説を重視し、文中のまとめから現在の博士や修士論文に至るまで、白川先生の学説が引用されていることをすぐに見つけ出すことができる。学術は絶え間なく進んでいるが、白川静先生の深く備わった系統的な論述や学術の地位は、すでに学術史上において人々に尊敬され重んじられる重要な指標となっている。

である。

#### 注

(1) 例えば屈万里先生の「甲骨学在日本」では以前に白川静先生の甲骨の著作を紹介したことがあり、「積文の方面に関する専門書として、白川静所編昭和三十八年(1963)出版の『殷甲骨文周』がある。この本は八十七片の甲骨を収録し、その目的は、元はその書法を鑑賞する頃に重きを置いていた。しかしその積文は、流俗の見解と同じでないところも多い。」「白川静の『甲骨金文論叢』。この本はガリ版印刷で、昭和三十三年(1958)から三十七年(1962)に出版され、十集がでている。その内容の大部分は甲骨資料から殷代の史実の文章を検討しており、殷代雄族考(共七篇、鄭・雀・畢・肅・皋・甬・戊の七族、毎族一篇)や、羌族考など、どれも大変功力が見られる著作である。」もともと『百年來中日關係論文集』(台北・中日文化經濟協會、1968)で発表され、のちに『屈万里先生文存・第二冊』(台北・聯經出版社、1985)に収録された(470-471頁)。のちに屈万里先生の遺稿を整理した『先秦文史資料考弁』の一書は、屈万里先生が比較的早くから白川静先生の『金文通釈』を評価していることが残っており、「近年の日本学者の白川静が著した金文通釈は、続々白鶴美術館誌中に発表され、少なくとも二十七輯が刊行され、まだ完結していない。最初は下の方に積まれていたがのちに評価されるようになった。白川の書は最後に出て、自然と彼の論断は、今までの諸家たちに勝っていた。」と述べている。氏著『先秦文史資料考弁』(台北・聯經出版社、1983)130頁。

(2) 白川静先生「私の履歴書」「私はその頃、台湾の屈万里先生、中国の楊樹達先生と文通、時に抜き刷りを交換したが、纏まった著作を頂くことが多かった。」参照『白川静著作集・雑纂』(東京・平凡社、2000)520頁。

(3) 許進雄ウェブサイト ([http://jameshu3284.blogspot.tw/2008\\_12\\_01\\_archive.html](http://jameshu3284.blogspot.tw/2008_12_01_archive.html)) 2008/12/1 「許進雄的回憶」 国外篇 (1998-1999) 241白川静教授」

(4) 白川静「西周彝器断代小記」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』36上(1965. 12)、147-157頁。白川静「再論蔑曆」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』51-2(1970. 6)、337-348頁。

(5) 発表「古代文字学之方法」、『第一屆國際漢学会論文集——語言与文

- 字組』(台北・中央研究院, 1981), 461—468頁。白川静先生「私の履歴書」私は周法高氏の招きで、語言文字組で発表した。(『白川静著作集・雑纂』, 537頁)
- (6) 文字学方面的の記書は以下の通りである。
- 白川静著、鄭清茂訳「作冊考」、『中国文字』第39冊(1971.03)・白川静著、鄭清茂訳「作冊考続」、『中国文字』第40冊(1971.06)・白川静著、張賢豹訳「青銅器時代」、『幼獅月刊』45—3(1977.3)、50—53頁・白川静著、范月嬌訳「淮戎与巡氏諸器」、『中華文化復興月刊』17—8(1984.08)、27—34頁。
- (7) 白川静撰、蔡哲茂、温天河訳『甲骨文的的世界・古殷王朝的縮構』(台北・蔡哲茂, 1977)
- (8) 白川静撰、加地伸行、范月嬌訳『中国古代文化』(台北・文津出版社, 1983)・白川静撰、蔡哲茂、温天河訳『金文的世界』(台北・聯経出版社, 1989)・白川静撰、鄭威訳『漢字百話』(新北市・大家出版社, 2012)
- (9) 周法高主編・『金文詁林』(香港・香港中文大学出版社, 1974—1975)
- (10) 周法高「金文詁林補自序」でこのように述べている。「林潔明君は、以前に東瀛に留学し、日本人学者の金文著作数十万言を翻訳した。書中の林潔明は主に加藤常賢、赤塚忠、白川静等三人の日本人の論著を翻訳した。周法高「金文詁林補自序」参照、『大陸雜誌』64—3(1983年8月)、30—31頁。
- (11) 現代の重要な文字学者——李学勤、裘錫圭は『金文通釈』は金文を研究するのに重要な参考書であると述べている。参照、裘錫圭、沈培・二十世紀的漢語文字学、『二十世紀的中国語言学』(北京・北京大学出版社, 1998), 122頁。李学勤「青銅器研究及其展望」、『中国古代文明十講』(上海・復旦大学出版社, 2003), 136頁。
- (12) 本稿では白川静先生の文字学の台湾に対する影響を整理し、主に「広義の文字学」とは、文字字形・音・義の討論を含み、そして古文字資料によって相関する古代歴史の情報を討論するものをいう。
- (13) 中央研究院院士の許倬雲は「周東遷始末」の文章でこう述べている。「白川氏『金文通釈』は、周金の研究が最も特出な綜合性の著作である。」中央研究院成立五十周年紀念論文集編輯委員會編「周東遷始末」、『中央研究院成立五十周年紀念論文集』(台北・中央研究院, 1978)。また許倬雲の『西周史・前言』にもこのような文が見られる。「金文史料は、過去に『两周金文辞大系』があり、最も揃っていると考えられていたが、現在では白川静
- 先生の『金文通釈』と「補釈」が最も揃った集である。」参氏著『西周史』(台北・聯経出版社, 1984), 頁V。按ずるに、この二段の話の中によって、白川静先生の材料の捜査及び論点提出することにおいて相対的に完全さと全面的さが際立たせられている。
- (14) 『金文通釈』が収める幾つかの器に関する文献は、どれも詳細註明で、裨益が非常に多い。」と述べている。周法高『三代吉金文存著録表』(台北・周法高, 1977)
- (15) 敵一萍「蔑曆古義上」、『中国文字』第10冊(1962.12)、1—13頁。
- (16) 屈万里「岳義稽古」、『清華學報』2—1(1960.5)、53—68頁。
- (17) 屈万里「積甬屯」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』37本(1967)、65—78頁。
- (18) 屈万里「殷虚文字甲編考釈」(台北・中央研究院歷史語言研究所, 1961.6)
- (19) 屈万里「西周史事概述」中央研究院歷史語言研究所集刊42—4(1971.12)、775—802頁。
- (20) 周法高先生は『金文詁林』の注釈で白川静先生の説は、このほかに以下のようにあると示している。888頁「造」、1103「疋」、1172「史」、3607「束」、4046「責」、4595「安」、5309「尸」、6118「執」、6151「」、6174「夫」、6299「洛」、6441「雷」、6824「」、6934「厥」、7131「」、7419「凡」、7509—7510「」、7588「銅」、7782—7783「」、7789—7790「官」、8215「子」。紙面に限りがあるので、ここでいちいち引用して説明はしない。
- (21) 屈万里「西周史事概述」中央研究院歷史語言研究所集刊四二・四(許倬雲・「周東遷始末」, 中央研究院成立五十周年紀念論文集編輯委員會編『中央研究院成立五十周年紀念論文集』(台北・中央研究院, 1978) 按ずるに、この文は1978年、遅くても1977年に出版され、その文章が出版されて間もなく、許倬雲か当時の著名な上古史学者であったことから、この文が討論されるようになり、当時の上古史研究の様子を浮かび上がらせるのに便利である。
- (22) 葉達雄「西周文、武、成、康時代的文治与武功」、『国立台湾大学歴史学系学報』第3期(1976.5) 1—33頁。
- (23) 葉達雄「西周馬政初探」、『国立台湾大学歴史学系学報』第4期(1977.5)、1—11頁。
- (24) 葉達雄は白川静の文章を引用している、例として以下のものがある。「西周厲宣幽時代の内政措施与対外関係」、『中国歴史学会史学集刊』第7期

- (1975. 6)、209—229頁。「西周兵制の探討」、『國立台灣大學歷史學系學報』第6期(1979. 12)、1—16頁。①「尊的啟示」、『國立台灣大學歷史學系學報』第7期(1980. 12)、31—42頁。②「邢國始末記」、『國立台灣大學歷史學系學報』第8期(1981. 12)、1—12頁。③「令彝銘文集與補史」、『國立台灣大學歷史學系學報』第9期(1982. 12)、1—17頁。④「西周土地制度探研」、『國立台灣大學歷史學系學報』第14期(1988. 7)、1—84頁。⑤「商周時代的師與師職試論」、『國立台灣大學歷史學系學報』第17期(1992. 12)、1—18頁。
- (25) 周法高「三十年來的殷周金文研究——三代吉金文存補編」代序、『大陸雜誌』60—6(1980. 6)、11—18頁。
- (26) 中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』(上海·中華書局, 1984)
- (27) 上海博物館商周青銅器銘文選編寫組『商周青銅器銘文選』(北京·文物出版社, 0986—0990)
- (28) 杜正勝「周代封建的建立」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』50—3(民1979. 09)、485—550頁。
- (29) 張惟捷「商代甲骨文獸刻辭研究」(輔仁大學中國文學系碩士論文、指導教授·蔡哲茂、2003)、65頁。
- (30) 陳冠勳「殷卜辭中牢字及其相關研究」(台北市立教育大學中國語文系碩士論文、指導教授·許進雄、2010)
- (31) 蔡依靜「出組卜王卜辭的整理與研究」(政治大學中國文學系碩士論文、指導教授·蔡哲茂、2011)
- (32) 林文仁「甲骨文象形文義考述」(靜宜大學中國文學系碩士論文、指導教授·邱德修、2012)
- (33) 林雅菱「甲骨塗辭研究·以塗朱甲骨為核心」(政治大學中國文學系碩士論文、指導教授·林宏明、2015)
- (34) 王蔚「殷商羌族及岳神芻議」(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授·許鈺輝、1988)
- (35) 石蘭梅「論商代的王權及其發展」(台灣師範大學國文系博士論文、指導教授·王仲孚、2001)
- (36) 林素娟「春秋至兩漢婚姻禮俗與制度研究」(清華大學中國文學系博士論文、指導教授·劉增貴、朱曉海、2002)、142頁。
- (37) 劉文強「春秋時代封建制度的解体」(台灣大學中國文學系博士論文、指導教授·張以仁、1983)
- (38) 王明珂「西周矢國考」、『大陸雜誌』75. 2(1987)、70—85頁。
- (39) 江淑惠「郭沫若之金石文字學研究」(台北·華正書局、1992. 5)、253、277、337頁。
- (40) 杜正勝「略論殷遺民的遭遇與地位」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』53. 4(1982)、661—709頁。
- (41) 杜正勝「周代封建制度的社會結構」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』50. 3(1979)、551—613頁。
- (42) 杜正勝「周代城邦」(台北·聯經出版事業公司、1979)
- (43) 王文陸「周宣王史料與史事彙考」(台灣大學中國文學系碩士論文、指導教授·張以仁、1984)
- (44) 陳昭容「從青銅器銘文看兩周漢淮地區的婚姻關係」、『歷史語言研究所集刊』75. 4(2004. 12)、635—697頁。陳昭容「兩周婚姻關係中的「媵」與「媵器」——青銅器銘文中的性別、身分與角色研究之二」、『歷史語言研究所集刊』77. 2(2006. 6)、193—278頁。
- (45) 雷晉豪「征服與抵抗·周代南土的政治動態與文化轉型」(台灣大學博士論文、指導教授·陳昭容、陳弱水、2013)
- (46) 沈寶春「商周金文錄遺考」(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授·許鈺輝、1982)
- (47) 江淑惠「齊國彝銘彙考」(台灣大學中國文學系碩士論文、指導教授·龔宇純、1984)
- (48) 洪恩耕「春秋晉系器考」(文化大學中國文學系碩士論文、指導教授·許鈺輝、1990. 6)
- (49) 金信周「兩周祝嘏銘文研究」(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授·季旭昇、2002)
- (50) 銘文の研究に關して、以下の論文がある。魏靜宜「周代戎事銘文研究」(高雄師範大學國文系碩士論文、指導教授·蔡崇名、1996)·林玉鳳「北趙晉侯墓地青銅器銘文研究」(台南大學中國語文系碩士論文、指導教授·汪中文、2005)·張莅「商周青銅食器及其銘文研究」(清華大學中國文學系碩士論文、指導教授·陳昭容、2011)·汪彤「獄器銘文彙積及相關問題研究」(台灣大學中國語文系碩士論文、指導教授·汪中文、2013)この類の引用は非常に多く、ここでは右のような例を挙げた。
- (51) 吳匡、蔡哲茂「積」(『故宮學術季刊』11. 3(1994)、77—112頁)。
- (52) 陳美蘭「西周金文地名研究」(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授·季旭昇、1997)·金允子「『左伝』与春秋銅器上所見方國名比較研究」(輔仁大學中國文學系博士論文、指導教授·許鈺輝、2002)
- (53) 方麗娜「西周金文虛詞研究」(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授·許鈺輝、1984)·林宛蓉「殷周金文數量詞研究」(東吳大學中國文學系

- 碩士論文、指導教授・陳昭容、2005)・陳美琪『西周金文字体常用詞語及文例研究』(中國文化大學中國文學系博士論文、指導教授・許鏐輝、2010)
- (54) 林聖傑『殷商至春秋時期金文人物名号研究』(東吳大學中國文學系博士論文、指導教授・許鏐輝、2004)・謝博霖『西周青銅器銘文人名及斷代研究』(政治大學中國文學系碩士論文、指導教授・蔡哲茂、2010)
- (55) 仁甫『試論西周初年殷遺民問題』(中興大學歷史系碩士論文、指導教授・王仲孚、1998)
- (56) 鄭憲仁『周穆王時代銅器研究』(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授・張光遠、季旭昇、1998)、84。
- (57) 郭秋鑫『先秦到兩漢之際女性特質的建構與事實』(成功大學歷史系碩士論文、指導教授・王健文、2001)
- (58) 柯佩君『西周金文部件分化與混同研究』(中正大學中國文學系碩士論文、指導教授・黃靜吟、2005)、6、21頁。
- (59) 雷晋豪『征服與抵抗・周代南土的政治動態與文化轉型』(台灣大學歷史系博士論文、指導教授・陳昭容、陳弱水、2013)、89頁。
- (60) 杜正勝『關於周代國家形態的蠡測——「封建城邦」說芻議』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』57、3(1998)、465—500。
- (61) 鍾柏生『卜辭中所見殷王田游地名考』兼論田游地名研究方法、『殷商卜辭地理論叢』(台北・芸文印書館、1989)、145頁。
- (62) 王明珂『華夏邊緣・歷史記憶與族群認同』華夏邊緣的漂移・誰是羌人(台北・允晨文化、1997)、頁228・拙作『甲骨卜辭戰爭刻辭研究——以賓組、出組、歷組為例』(台灣大學中國文學系博士論文、指導教授・徐富昌、2013)
- (63) 引用している例として、王讚源『周金文積例』(台北・文史哲出版社、1980)、3)・全広鎮『兩周金文通假字研究』(台北・台灣學生書局、1989)・陳美琪『西周金文字体常用詞語及文例研究』(中國文化大學中國文學系博士論文、指導教授・許鏐輝、2001、5)・洪恩耕『春秋晉系器考』(文化大學碩士論文、指導教授・許鏐輝、1990、6)などがある。
- (64) 周鳳五『說巫』、『台大中文學報』3期(1989、12)、269—291頁。
- (65) 許育竜『說文』亦声字研究』(淡江大學中國文學系碩士論文、指導教授・陳廖安、2004)、162頁。
- (66) 劉紹銘『「文」字考・關於文學——人類學的證積可能』(中正大學中國文學系博士論文、指導教授・鄭毓瑜、謝大寧、2008)
- (67) 陳美蘭は『漢字百話』「告」の上方は小樹枝であると説を引用している。詳氏著『説告』、『中正漢字研究』22期(2013、12)、1—17頁。
- (68) 例えば、李晟碩『探討漢字元素於產品設計之應用』(雲林科技大學工業設計系碩士論文、指導教授・林勝吉、2011)・劉育瑜『漢字文化創意商品設計之視覺符号研究』(高雄師範大學視覺設計系碩士論文、指導教授・李億熙、2012)・馮斯蒂『漢字表意皮革工藝技法與創作研究』(台灣師範大學設計學系碩士論文、指導教授・梁桂嘉、2012)・林竺君『漢字的造字原理應用於兒童插畫之創作研究』(台灣藝術大學視覺傳達設計系碩士論文、指導教授・楊清田、2014)などがある。
- (69) 白川静文の文字の考釈の方法について、氏の著作を参考にすべし。「古代文字学の方法」、『中央研究院國際漢學會議論文集』(台北・中央研究院、1981、10)、461—468頁。
- (70) 敵一萍『蔑曆古義上』、『中國文字』第10期(一九六二、12)、1—13頁。
- (71) 邱德修『商周金文蔑曆初探』(台北・五南圖書出版公司、1986、2)
- (72) 白川静著、蘇冰訳『常用字解』(北京・九州出版社、2010)、頁390。
- (73) 黃錦樹『文字也・現代危機裡的文字作為歷史遺留物的國學及她的腳』、『中山大學學報』36期(2014、01)、1—29頁。
- (74) 李孝定、周法高、張日昇編『金文詁林附錄』(香港・香港中文大學、1977)、1661—1662頁。
- (75) 鄭憲仁『周穆王時代銅器研究』、109頁。
- (76) たえば金文の旧積では「貯」の「貯」字としていたが、李学勤が改めて「賈」と解釈した。(李学勤・「魯方彝与西周商賈」、『当代学者自选文库——李学勤卷』(合肥・安徽教育出版社、1999)、302—308頁。包山楚簡が「貯」とするのを旁証とできるであろう。
- (77) 杜正勝『關於周代國家形態的蠡測——「封建城邦」說芻議』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』57、3(1998)、465—500頁。
- (78) 鍾柏生『卜辭中所見殷王田游地名考』兼論田游地名研究方法、『殷商卜辭地理論叢』(台北・芸文印書館、1989)、145頁。
- (79) 「奠」に関して、のちに裘錫圭が奠は動詞の意味を持ち、地名ではないとしている。裘錫圭『說殷墟卜辭的「奠」——試論商人安置服屬者的一種方法』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』64—3(1993)、659—686頁。
- (80) 蔡佩玲『記事、人称与女性作器・西周時期殷人家族器銘研究』(台灣大學歷史學研碩士論文、指導教授・閻鴻中、2001)、30頁。
- (81) 黃銘崇『晚商王朝的族氏与族氏政治』、『第四屆國際漢學會議論文集』(台

- 北・中央研究院, 2013, 10)、66頁。
- (82) 韓巍『西周金文氏族研究』(北京大学中国語言系博士論文, 2007)、85頁。
- (83) 王蔚『殷商羌族及岳神芻議』(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授・許鈞輝, 1987)。
- (84) 陳美蘭『西周金文地名研究』(台灣師範大學國文系碩士論文、指導教授・季旭昇, 1997)。
- (85) 葉達雄『西周昭穆恭懿孝夷時代的内政措施与对外關係』、『国立台湾大學歷史系系學報』第5期(1978, 6)、16頁。
- (86) 王文陸『周宣王史料与史事彙考』(台灣大學中國文學系碩士論文、指導教授・張以仁, 1984)、163頁。
- (87) 高木森『西周青銅彝銘彙考』(台北・中国文化大學出版部, 1986)、83頁。
- (88) 蔡哲茂『武丁卜辭中「父壬」身份的探討』、『古文字与古代史』第三輯(台北・中央研究院歷史語言研究所, 2012, 3)、125—147頁。
- (89) 洪燕梅『秦金文研究』(政治大學中國文學系博士論文、指導教授・簡宗梧、孔仲温, 1997)、33頁。
- (90) 周法高『殷周金文中于支紀日和十干命名的統計』、『大陸雜誌』68—6(1984)、1—7頁。
- (91) 郭沫若『兩周金文辭大系』(上海・上海書店, 1999)、95頁。
- (92) 唐蘭『論彝銘中的「休」字』、『唐蘭先生金文論集』, 62—65頁。
- (93) 周法高『三十年来的殷周金文研究——「三代吉金文存補編」代序』、『大陸雜誌』60—6(1980, 6)、11—18頁。
- (94) 同上。
- (95) 周法高・「陝西省岐山泉董家村西周銅器的年代問題」、『大陸雜誌』58—3(1979, 1)、1—11頁。由於銘文年代的考訂には限りがあり、葉達雄は周法高、白川静が「衛盃」、「五年衛鼎」、「九年衛鼎」の差異について、こう述べている。「白川静と周法高の二氏はどちらも曆法と金文の月相によって論を立てている。しかしながら、立法と月相を根拠に論を立てるのは、どちらも一家の言をなせるとは言っても、目前で止まり、どれも論を定まらせることができないのである。」金文時代の推定はさらに多くの資料を対比させることで頼りにできることが明らかになる。参氏著『西周土地制度探研』、『国立台湾大學歷史系系學報』第14期(1988, 7)、64頁。
- (96) 周法高『論金文月相与西周王年』、『古文字学論集』初編(1983)、309—350頁。周法高『西周年代新考——論金文月相与西周王年』、『大陸雜誌』68—5(1984)、454—487頁。
- (97) 張光遠『春秋晚期齊莊公時庚壺考』、『故宮季刊』16—3(1982)、83—106頁。
- (98) 洪恩耕『春秋晋系器考釈』(文化大學中國文學系碩士論文、指導教授・許鈞輝, 1990, 6)、146頁。
- (99) 張光遠『大英博物館新藏西周康侯簋考釈——兼論衛都地点及周初兩次伐商的銅器實録』、『故宮季刊』14—3(1980)、69—96頁。
- (100) 葉達雄『邢國始末記』、『国立台湾大學歷史系系學報』第8期(1981, 12)、7頁。
- (101) 周法高『康侯簋考釈』後記、『大陸雜誌』61—3(1980)、1—3頁。
- (102) 謝博霖『西周青銅器銘文人名及断代研究』(政治大學中國文學系碩士論文、指導教授・蔡哲茂, 2010)、189頁。
- (103) 張光遠『戰國齊桓公諸器統考』、『故宮季刊』12—2(1977)、59—80頁。
- (104) 杜正勝『周代封建的建立』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』50—3(民1979, 09)、485—550頁。
- (105) 葉達雄『西周兵制的探討』、『国立台湾大學歷史系系學報』第6期(1979, 12)、1—16頁。
- (106) 葉達雄『西周土地制度探研』、『国立台湾大學歷史系系學報』第14期(1988, 7)、49頁。この説に賛成する。
- (107) 黄銘崇『論殷周金文中以「辟」為丈夫称稱的用法』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』72—2(2001)、393—441頁。
- (108) 周聰俊『饗礼考弁』(台北・文史哲出版社, 2011, 1)、163頁。
- (109) 朱歧祥『由方法学論近人誤用甲骨舉隅——以神話研究為例』、『静宜人文学報』第9期(1997, 6)、1—12頁。
- (110) 陳致『說「南」——再論『詩經』的分類』、『中國文哲研究集刊』12期(1997, 03)、355—402頁。
- (111) 周法高『三十年来的殷周金文研究——「三代吉金文存補編」代序』、『大陸雜誌』60卷6期(1980, 6)、11—18頁。

(台湾大學中國文學系博士後研究員)

